



長崎で連帯、そして軍縮への誓いをあらたに



©UN Photo/Daniel Powell

浦上天主堂で高見三明大司教より説明を受けるグテーレス事務総長。長崎に投下された原爆で被爆した「聖アグネス像」は1983年に国連に寄贈された

今年8月のアントニオ・グテーレス事務総長の訪日は歴史を刻むものとなりました。被爆73周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列は、初めての国連事務総長による長崎の式典への出席でした。長崎は5世紀近くにわたってグテーレス事務総長の母国・ポルトガルと深い政治的・文化的・宗教的つながりをもつ国際的な街であると同時に、平和と安定を願うあらゆる人々にとって「強さと希望の光であり、人々の不屈の精神の象徴」でもあります。

その長崎で平和祈念式典に臨んだグテーレス事務総長は「原爆という大惨事の焼け跡から、被爆者の方は人類全体のために自らの声を上げてくれました。私たちは、その声に耳を傾けなければなりません」と被爆者の勇気に敬意を表すとともに、核廃絶への思いを込め「決して広島島の悲劇を繰り返してはなりません。長崎の悲劇を繰り返してはなりません。一人たりとも新たな被爆者を出してはなりません」と訴えました。

さらにグテーレス事務総長は、原爆投下から73年経った今、核軍縮プロセスがほぼ停止し、これに対する不満として昨年

核兵器禁止条約が採択されたという厳しい状況を背景に、今年5月にグローバルな軍縮イニシアティブを発表したと言及。核兵器の完全廃絶は、国連の軍縮における最優先課題だと強調しました。そして、「核保有国には核軍縮をリードする特別の責任があります」と述べ、核保有国に対して核兵器廃絶へのリーダーシップを強く求めています。締めくくりに事務総長はこう世界に呼びかけました。「私たちみんなで、この長崎を核兵器による惨害で苦しんだ地球最後の場所にするよう決意しましょう」と。

被爆者の方々と車座になった対話、小学生との折り鶴交流、長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館への訪問— こうした折に事務総長が口にしたのが「連帯」と「軍縮への誓いをあらたに」という言葉でした。その思いは、平和祈念館での記帳にも残されています。「すべての原爆被害者、そのご家族のみなさま、そして長崎にお住まいの方々との深い連帯を私は表明します。私のメッセージは明確です。勇気ある被爆者の叫びに続くこと— 長崎を二度と繰り返さないように、と。事務総長にとって、平和への誓いをあらたにする、印象に残る訪問となりました。

若者のカメラに収められた日本の SDGs

～ SDGs 学生フォトコンテスト 2018 受賞者を発表～

今年で3回目となる「持続可能な開発目標 (SDGs) 学生フォトコンテスト」。国連デーの10月24日、上智大学の四谷キャンパスで表彰式が行われました。大賞と優秀賞の計4点を受賞者の喜びの言葉とともにご紹介します。

高校生も初めて参加 応募者の6割に

「撮ってみよう!日本で見つけたSDGs」をテーマに、国連広報センターと上智大学が主催した今年のSDGs学生フォトコンテストには約600点の応募作品が寄せられました。厳正な審査の結果、大賞(外務大臣賞)1点、優秀賞3点、入賞10点の計14点の入選作品が決定しました。全応募作品の頂点に輝いたのは、上智大学文学部新聞学科2年の星野雄飛さんの作品「不調和」です。

今年のコンテストは、これまでと異なり、応募対象を大学生、短大生、大学院生、専門学校生に加え、初めて高校生にまで広げて実施されました。応募者371名のうち6割に近い208名が高校生。各々のみずみずしい感性で、日本という身近な場所にある様々なSDGsの課題を写真として浮かび上がらせました。

若者へのメッセージ

「今年のコンテストは、受賞者14名のうち5名が高校生という若者の可能性を感じさせる堂々とした素晴らしい結果になりました」と語る国連広報センターの根本かおる所長。「これをきっかけに、世界が抱える課題について、自分の日々の暮らしと結びつけ、解決に向けた行動につなげていけるよう願っています」と、若者に呼びかけました。

「叡智が世界をつなぐ」という建学理念の



大賞(外務大臣賞)
「不調和」 星野 雄飛
(上智大学文学部新聞学科2年)

「海に打ち上げられたスーパーのカゴ。真夜中の海岸で、光に照らされて不気味に浮かび上がるこのカゴを見た瞬間、『これだ!』とSDGsを思い出し、迷わずシャッターを切りました。人類の歴史よりも長い時間をかけて宇宙からやってきた美しい光とダイナミックな流星を借景に、恐ろしいほどの存在感を醸し出すプラスチック。風景写真においてはフレームアウトするのが定石ですが、それを入れ込むことこそが自然環境を直視した表現だと考えました。プラスチックごみによる環境汚染問題が話題になっていますが、自分たちがいかに地球に悪影響を及ぼす製品を日常的でないものにしていくかが課題だと思っています」



下にグローバル化を推進する上智大学の曄道佳明学長は、「学生たちがSDGsの達成に向けて大きな役割を担っていくと考えます」と述べ、本フォトコンテストによって若者の間でSDGsの認知度が向上することに期待を寄せました。

審査委員長のレスリー・キー氏は、「今回は日本国内で撮った写真のみを対象としたにもかかわらず、これほど高いレベルの作品が数多く集まったことには驚きを隠せません。SDGs達成に向けた熱意が凝縮されている作品に心を打たれました」と評しました。また、鈴木秀生外務省地球規模課題審議官は、「応募作品には、SDGsに関する課題やその解決に向けた希望やヒントを切り取った素晴らしい作品が沢山あり、これらの作品が次世代によるSDGsへの具体的行動としてつながっていくことを大いに期待しています」と述べました。

ユースこそが、持続可能な世界の創り手に

SDGsへの関心が高まる昨今。ともすると地球規模の課題に偏りがちなSDGsですが、実は人権、貧困と格差、文化と生物の多様性、自然環境の保全など私たちの暮らしと深く結びついています。「日本ではどんな課題があるのか」「解決するにはどうすればいいのか」を意識しながらシャッターを切ったと語る受賞者たちは、レンズを通して身の回りの社会課題を見つめ直しました。コンテストが若者一人ひとりが持続可能な世界の創り手として成長していくきっかけになることを願います。



優秀賞

「明暗」 阪元 周
(都立武蔵高校2年)

「東京都庁付近、高架下で撮影しました。政治や経済の中心で活発な街のすぐそばにホームレスの人たちのダンボールハウスがあります。路上で寝ているホームレスの人々と、まるで彼らが存在しないかのように颯爽と通り過ぎる人々とのギャップに驚きました。この写真を通じて、このような貧困や格差社会の問題を多くの人に知ってもらい、また、正面から考えてほしいと思います」



優秀賞

「連鎖する海岸」 千葉 優一
(東京大学大学院2年)

「日頃、海から少し距離のある場所に住む僕には、生命の連鎖の中で『海』を感じる機会が少なく、どこか隔たりがあるように感じていました。しかし、ある日の早朝の海岸、そんな隔たりを打ち壊し、海と陸との連鎖を感じさせるような風景に出会いました。波に打ち上げられたエイとカラスの群れ。生命のバトンは、確かに海から陸へつながれていると感じました」



優秀賞

「炎と闘う」 久保田 友宏
(上智大学文学部新聞学科3年)

「熊手を使って枯れ木や枯れ草を均す男性。縄文時代から日本各地で行われていた焼畑が、50年ぶりに静岡県静岡市葵区井川に復活しました。焼畑は単なる略奪農法に過ぎないと思われがちですが、本来は森の豊かさを守り生命を循環させ、森を若返らせる手段として知られています。こうした伝統は、持続可能であるからこそ長きにわたって受け継がれてきたのではないのでしょうか」



入賞は以下の10名の皆さんです。

- ・武藤 有紀 (上智大学総合グローバル学部総合グローバル学科)
- ・渡部 博明 (和歌山県立医科大学医学部)
- ・欧 紹焜 (九州大学大学院芸術工学府)
- ・黒谷 ケイト (東京都立国際高等学校)
- ・桑原 豊 (高千穂大学商学部)
- ・菊池 拓未 (北海道稚内高等学校)
- ・池田 匠 (学校法人静岡理工科大学星陵高等学校)
- ・PAOLOREGEL SAMONTE (国連大学サステイナビリティ高等研究所)
- ・吉田 真依 (岡山県立瀬戸高等学校)
- ・香取 声 (法政大学国際文化学部国際文化学科)

Thank you & Congratulations!

上智大学で行われた表彰式には受賞者のうち12名が出席、日本最北端の北海道稚内市から九州の福岡市まで、まさに全国各地から駆け付けてくださいました。式後の懇親会では、国連広報センターの若きインターンが受賞者にインタビュー取材し、ブログ記事にまとめています。こちらもぜひご一読ください！

<http://blog.unic.or.jp/>

国連広報センターと上智大学が主催するSDGs学生フォトコンテストは、Getty Images ジャパン、株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパンによる特別協力、株式会社シグマ、吉本興業株式会社による協力、そしてメディアパートナーの朝日新聞社と、様々な方からの協力を得て実現可能となりました。皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

私たちの未来は連帯にかかっている

～多国間主義を再活性し、すべての人々の尊厳を守るために～

今夏、日本を含め世界中で異常気象や大きな自然災害が多発し、気候変動が速いスピードで進んでいることが浮き彫りになりました。その記憶も冷めやらぬ 9 月の国連総会ハイレベルウィークでは、世界が直面する課題に取り組むには、国際社会の良識ある一致団結した行動が欠かせないことが再確認されました。気候変動、そして事務総長が自ら招請した 3 つの会合を中心に振り返ります。

私たちの存在をおびやかす脅威

9 月 25 日、総会の一般演説に先立ちスピーチしたグテーレス事務総長はまず、「Trust Deficit Disorder (信頼欠乏症)」という言葉を用いながら、国連が体现する多国間主義が危機に瀕していると警鐘を鳴らし、加盟国の連帯を強く求めました。その上で、気候変動を「緊急性を帯びてきた現代を象徴する課題」の一つに挙げ、それは「私たちの対策よりも速く進んでおり、そのスピードは衝撃波となって全世界に SOS を発信している」と述べる一方、取り組みは十分でないと強調。「科学者の声に耳を傾け、目の前で起きていることに目を向けなければならない」とし、「12 月にポーランドで開催される次の締約国会合 (COP24) が、加盟国間の不和を改めて映し出すことを許してはならない」と述べ、人類の存在そのものを脅かす気候変動の脅威に世界が一致団結して対応することを呼びかけました。

国連は史上最大の若者世代とともに

「今日は若者にとって、国連での新時代の

幕開けにあたる」事務総長がこう語ったのは 9 月 24 日、若者のための新戦略「YOUTH (ユース) 2030」の発表の場でした。全世界で 18 億人という史上最大の若者世代は、持続可能な開発目標 (SDGs) の達成において重要な鍵を握りますが、その 5 分の 1 が就職も就学も訓練もできず、4 分の 1 が暴力や武力紛争の影響を受けるなど課題に直面しています。若者のエンパワーメントと支援を図り、その潜在能力の発揮を目指す戦略を示した事務総長は、すべての若者に「自主的に行動しよう。そして自らが解決策の一部となろう」と呼びかけました。

世界の変革には「資金の急増」が必要

「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が加盟国の全会一致で採択されてから 3 年が経過し、その具体的目標を掲げた SDGs も世界で浸透しつつあります。一方で 2030 アジェンダの資金ニーズは年間 5 兆ドルから 7 兆ドル程度と膨大な額にのぼり、資金の動員にはある程度の前進が見られるものの、その前進をさらに牽引する緊急行動が必要です。グテーレス事務総

長は 9 月 24 日にハイレベル会合を開き、「2030 アジェンダ資金確保支援戦略」の立ち上げを発表。グローバルな金融・経済政策をアジェンダと整合させること、持続可能な金融戦略を強化することなどを掲げ、加盟国に協力を呼びかけました。

平和維持活動のための行動を

今年 70 周年を迎えた国連平和維持活動 (PKO)。平和維持要員には現地の複雑な紛争や行き詰った和平プロセス、多国籍テロの激化への対処などが求められています。9 月 25 日のハイレベル会合で事務総長が強調したのは、「直面する最大の課題は期待と現実とのギャップ」。より現実的な期待をもって平和維持の焦点を定め直し、ミッションをより強く安全に、より大きな政治的支援を動員することが必須です。「ブルーヘルメットの存在は最も弱い立場にある人々との国際的連帯を示す強いメッセージ」と述べ団結を呼びかけました。

*演説の日本語訳全文は以下をご覧ください。

http://www.unic.or.jp/news_press/messages_speeches/sg/



© UN Photo

10 月 1 日に地震と津波に襲われ 2,000 人以上が死亡、数千人が被災して避難を強いられているインドネシアのスラウェシ島で



© UN Photo/Mark Garten

「ユース 2030」の一環である「Generation Unlimited」キャンペーンの発足にあたり、韓国の人気グループ BTS (防弾少年団) が国連本部で登壇



© UN Photo/Laura Jarriel

ハイレベルウィーク中、ニュージーランドのアーダーン首相は総会での関連会合に生後 3 カ月の長女とともに出席。世界のメディアの注目を集めた

インターンシップを通して見た国連

国連広報センター（UNIC）では随時 5-6 名のインターンが活躍しています。職員と共に日々の業務に取り組んでいるインターンは、国内外の大学生・大学院生（在学・既卒）、留学生、社会人など、様々なバックグラウンドを持っています。将来、国際機関で働くことを目指して「国連職員として働く」イメージをより具体的にしたい人もいれば、国連に興味がある、海外留学を控えて自分の関心の幅を広げたいなど、志望動機も人それぞれです。

今回は UNIC で 2018 年 3~6 月までインターンシップを経験し、現在は外務省総合外交政策局・国連企画調整課に勤務する山田怜さんに、UNIC でのインターン経験について紹介してもらいます。異なる立場で国連の広報発信に携わるやりがい、インターンシップへのチャレンジを考えている方へのメッセージを寄せていただきました。

外務省
総合外交政策局・国連企画調整課

山田 怜



国連広報センターを支える個性豊かなインターンと職員

国際機関を体感したい

大学卒業後、民間企業に2年間勤務した私は、国連でのキャリアを目指す前に一度、国際機関に身を置き、そこから見える世界を体感したいと思い、志があれば学部卒の社会人であっても応募することができる国連広報センター（UNIC）でのインターンシップに挑戦しました。この決断をした半年後、UNIC を経てさらに外務省で、広報を通じた国連に関する認知促進を担当することになったのは思いがけない幸運でした。

人々の行動につながる発信を

所長も含めて7名という限られた職員数で、「日本のより多くの人に国連について知ってもらう」ために活動をしている UNIC では、インターンでも責任ある仕事を任せてもらえる機会が多くあり、国連の文書やプレスリリースの翻訳、イベントのブログ記事作成など、自分が発信者として携わったものが世の中の多くの人の目に触れます。「広報」の難しさや面白さを実感した3カ月間でした。なかでも、6月8日の「世界海洋デー」を記念して開催されたイベントを受けて記事を作成した際、ただ発信するのではなく、記事を読んだ人が何か少しでも行動を起こしてくれるように、また、日本で生活する人

に「プラスチック汚染をやめよう」という国連のメッセージをわかりやすく伝えることができるように工夫を凝らすことの大切さについて、根本かおる所長から直接学ぶことができたのはとても有意義でした。

国連の広報発信を異なる立場で深める

現在、外務省では日本で国連に対する理解促進を担当し、日本における様々な活動を支援しています。「SDGs をはじめとする国連のグローバルなメッセージをより多くの人に広める」ためのパートナーとして、UNIC の皆さんと一緒に仕事ができることを嬉しく感じるとともに、広報を通じた国連に関する認知を促進するための様々な取り組みについて、外務省の立場からも学びを深められていることにやりがいを感じています。実務を通じて得られた民間、国際機関、政府とい

う3つの視点は今の自分の強みであり、今後のキャリアに活きるものであると思っています。

「まずはやってみる」精神を大切に

以前と比べキャリアの選択肢が広がる中、自分が何をライフワークとするかについて自信を持って選択を重ねていくことは簡単ではありませんが、深く考え過ぎずに「まずはやってみる」精神が大事だといつも自分に言い聞かせています。想像もしなかった世界に身を置いている私のように、自分の思いに素直でいることで後から自然と進む道が見えてくることもあります。この記事を読んで「国際機関でインターンしてみたい!」と思ってくださる方が一人でもいれば嬉しいですし、何かに挑戦しようとしている方の背中を少しでも後押しすることができれば幸いです。



国連訪問を通じて中学生や高校生に「国連」について興味をもってもらうきっかけを作るのも、UNIC の大事な役割の一つです



インターンシップ修了証を手に根本かおる所長と記念の一枚。「広報」の難しさや面白さを実感した充実の3カ月間でした

試練に直面し続けるパレスチナ難民

支援する国連機関 UNRWA を訪ねて

中東でパレスチナ難民が発生して今年で 70 年。約 530 万人にのぼる難民の多くはヨルダン、レバノン、シリア、ヨルダン川西岸地区、およびガザ地区で UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の支援を受けながら暮らしています。今年 4 月に UNRWA の活動現場を視察した国連広報センターの妹尾靖子(せのお・やすこ) 広報官が報告します。

教育、それは何よりも大切な「難民の宝」

UNRWA 予算の 6 割近くは教育に使われ、677 の小中学校で学ぶ約 51 万人のパレスチナ難民の子どもに対して基礎教育が無償で提供されています。3 万人を超える UNRWA のスタッフの約 2 万人は教師です。難民の子どもたちにとって、よい教育を受けよい成績を修めることは夢の実現への第一歩です。

一般住居を借り上げて運営している学校をヨルダンで視察しました。廊下も狭く、運動場、理科の実験室などありません。この学校は、午前男子、午後女子生徒の学校として 2 部制で運営され、校長や教師まで総替わりします。「活発に動き回る年頃の小・中学生にはとても窮屈な学校です。しかし、生徒の成績は地域でも 1、2 位を争う優秀さで、UNRWA の学校の生徒の識字率と教育達成度は、中東で最も高いレベルを誇っています」と、校長は鼻が高いようです。休憩時間には、唯一みんなが集まれるスペースで手足のストレッチです。実際、校庭もないのでこれが精一杯です。

障害を持つ難民を置き去りにしないために

今回の視察では、ガザで唯一の視覚障害を持つ子どもたちの学校として 1962 年に設立された視覚障害者のためのリハビリセンター「RCVI」を訪ね、全盲クラスの 5 年生のハーラさん(11 歳)に話を聞くことができました。点字タイプを得意とするハーラさんは「将来は弁護士になりたい」と夢を語ってくれました。「彼女の目の病状は悪化して、医師からは義眼にするよう言われています」と自らも弱視のファラハート校長が教えてくれました。その眼科手術を受けるには、ガザ地区を出て設備の整った医療機関に行く必要があるそうです。少女は周囲の心配をよそに、近い将来に目の手術を受けることができると信じて前を向いて明るく生きています。

伝統刺繍はパレスチナ難民女性の誇り

難民女性たちが自らの文化の継承として取り組んでいるものにパレスチナ刺繍があります。キリストの生誕地ベツレヘム近くの

ベイト・ジブリン キャンプでは、特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター(JVC)が難民女性の刺繍プロジェクトを支援し、出来上がった刺繍作品を日本で販売しています。「高品質に加え、色やデザインも日本人の好みに合わせてもらう必要があります」と言うのは JVC エルサレム事務所の山村順子さん。難民女性にとって刺繍は単に収入源ではなく、孤立しがちな彼女たちの生活の大きな楽しみになっています。

誰一人取り残さない

パレスチナ難民を支援する UNRWA の活動現場では「誰一人取り残さない」という SDG s の精神を体現するような支援を多く目にしました。そこには日本人職員や日本の NGO の姿があり、その活躍ぶりを多くの方々に知ってもらいたいと願っています。UNRWA 活動の視察については、国連広報センターのウェブに 6 回シリーズで掲載しています。そちらもぜひご覧ください。

http://www.unic.or.jp/news_press/info/30656/



一般住居を借り上げているこのヨルダンの UNRWA 中学校には校庭がない。手足のストレッチで休憩時間を過ごす 男子生徒たち



ガザの視覚障害者のためのリハビリセンターで点字を学ぶ全盲のハーラさん。得意の点字タイプで夢に向かって勉強を続けている



難民キャンプの刺繍グループを支援する JVC エルサレム事務所のスタッフ、そしてインターンの皆さんと一緒に

SDGs TOPICS@UN

「きかんしゃトーマス」SDGs で国連とコラボ



世界的に人気の幼児向けアニメシリーズ「きかんしゃトーマスとなかまたち」が国連に協力し、未就学児に持続可能な開発目標（SDGs）を紹介する共同企画を進めることが発表されました。

この協力を通じ、17のSDGs

のうち5つの目標が「きかんしゃトーマス」新シリーズ26話のうち9話に盛り込まれることになります。具体的には、目標4「質の高い教育をみんなに」、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」、目標11「住み続けられるまちづくりを」、目標12「つくる責任 つかう責任」、目標15「陸の豊かさを守ろう」の5つです。また、今回の協力に併せて新たに設けられたウェブサイト AllAboardForGlobalGoals.com では、幼児向けの短編動画や保護者向けのヒント、双方向活動などが利用できるようにしました。ぜひご覧ください！

http://www.unic.or.jp/news_press/info/30119/

SDGs TOPICS@UNIC

“やめよう、プラスチック汚染”キャンペーン



ご存知ですか。毎年800万トン以上のプラスチックがゴミとして海に流れ込み、このままでは2050年の海はプラスチックの方が重量ベースで魚よりも多くなってしまいます。この海洋プラスチック汚染に目を向けようと、国連環境計画が中心となって「やめよう、プラスチック汚染」キャンペーンを展開中。国連広報センターも6月8日の世界海洋デーに「海の豊かさを守ろうシンポジウム」を国連大学と共催し、東京海洋大学名誉博士・客員准教授のさかなクンと一緒に、豊かな海を守るために日本からできることを考えました。

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/beat_plastic_pollution/

SDGs TOPICS@UN

日本でのSDGs発信の取り組み、世界と共有



「第67回国連広報局/NGO会議」が8月22-23日、ニューヨークの国連本部で開催され、300を超えるNGOの代表約2,000人が参加してグローバル課題について話し合いました。今年のテーマ「多国間主義の価値」と並んで重点議題になったのは、国連と市民社会のパートナーシップを緊密化し、持続可能な開発のための2030アジェンダの実現に向けた協力。根本かおる所長は吉本興業・電通・SDGs市民社会ネットワークの方々とは会議に出席し、日本で様々な分野のアクターが連携してSDGsの発信に協働で取り組んでいる事例について発表を行い、世界と共有しました。

<http://blog.unic.or.jp/entry/2018/09/28/101612>

SDGs TOPICS@UN

SDG メディア・コンパクトが発足



© UN Photo/Rick Bajornas

SDGsに対する認知向上に新たな弾みをつけるためのイニシアティブとして、国連は9月23日、メディアとの協力の枠組み「SDGメディア・コンパクト」の発足を発表しました。

30社以上の創設メンバーには、日本から朝日新聞、日刊工業新聞、日本テレビの3社が参画しています。メディア・コンパクトはSDGsに関する世論を喚起し、アクションを推進することを目指した、報道機関とエンターテインメント・メディアのいわば“同盟”です。創設メンバー全体で、すでに4大陸の80カ国以上に数十億人の視聴者と読者を有し、今後さらに多くの参画が見込まれています。

http://www.unic.or.jp/news_press/info/30325/



SDGs についてお話しすると、「誰一人置き去りにしない」というその大原則に強く賛同するという声をよく聞きます。一人ひとりの尊厳と個性を貴ぶ姿勢は、不寛容と排外主義の風が強く吹く今だからなおのこと、「痛み」がわかる方々の間で深い共感を生むのでしょう。人権に根差した「誰一人置き去りにしない」という考え方の力を実感しています。



「世界人権宣言 70 周年と SDGs」

私自身にとっても、「誰一人置き去りにしない」は、難民や障害者、女性、シニア層をはじめとする取り残されがちな人々を、最初から救い上げようとする姿勢として重要な価値観です。他人と群れることに違和感の強かった子ども時代、男性中心の日本の企業社会で働く女性として、故郷を追われた難民の権利のために寄り添って支援活動にあたった国連機関職員として、そして今、SDGs をはじめとする国連の課題について広報発信する中でその思いを強くもつようになりました。昨今広がりつつある「異なるもの」や「弱者」への差別や不寛容に対して反対の声を上げ、相対的な貧困などの社会課題にバランスの取れた対応を求める視座が今ひと際大切になっています。

今年は 1948 年に世界人権宣言が採択されてから 70 年という節目の年です。エレノア・ルーズベルトがとりまとめた世界人権宣言には、2 度の世界大戦で傷ついた人々の思いや、平和と自由への強い願望が込められています。当初は法的な拘束力を持たず、後に国際人権法が発展して法的拘束力が備わりようやく世界人権宣言の内容に追いついたのですから、時代を先取りしていたと言えるでしょう。人権宣言をとりまとめた人々の先見性と、その精神を受け継ぐ条約の交渉にあたった人々の忍耐力と行



© UN Photo



© UN Photo/Sergey Bermeiev



© UN Photo/Manuel Elias

【写真上】世界人権宣言の起草に当たった一人が米国第 32 代大統領フランクリン・ルーズベルトの夫人で、米国の国連代表も務めたエレノア・ルーズベルト。世界人権宣言のポスターを手に（1949 年撮影）

【写真中】2001 年のノーベル平和賞は国連とアナン事務総長に授与された。オスロでの授与式で笑顔を見せるアナン氏と当時の総会議長を務めていた韓昇洙（ハン・スンス）氏

【写真下】8 月 18 日に 80 歳で亡くなったアナン元事務総長の逝去を受け、事務局ビル内には追悼スペースが設けられた

動力とを思わないではいられません。そして、SDGs の掲げる「誰一人置き去りにしない」は、まさに一人ひとりの尊厳を大切に

する人権が根本にあります。世界人権宣言 70 周年に際して、現代に生きる私たちは全国連加盟国の総意で成立した SDGs に、これからどのように魂を吹き込んでいけるのだろうか考えると、身の引き締まる思いがします。8 月に急逝した第 7 代国連事務総長コフィー・アナン氏の追悼式典が 9 月 21 日にニューヨークの国連本部で執り行われましたが、アナン氏がとりまとめたに腐心し、ノーベル平和賞受賞に至った「ミレニアム開発目標（MDGs）」こそが SDGs に道筋をつけたと言えます。よりよい世界を築くためのバトンというものを意識せずにはいられません。8 月に出張でニューヨークの国連本部を訪れた際、このような思いを抱きながらアナン氏を悼むメッセージを記帳しました。

未来の子どもたちが歴史を振り返った時に、SDGs をポジティブな遺産として感じてもらえるよう、将来世代の芽を摘むことなく多様な人々が自分らしく暮らしていける社会の実現に、個人・家庭・地域・企業・組織としては非身近なところからアクションを起こしていただきたいと思います。

Contents

P2-3 若者のカメラに収められた日本の SDGs
SDGs 学生フォトコンテスト 2018

P4 私たちの未来は連帯にかかっている
～ 第 73 回国連総会/ハイレベルウィーク～

P5 インターンシップを通して見た国連
山田 怜 外務省 総合外交政策局
国連企画調整課

P6 試練に直面するパレスチナ難民

P7 TOPICS@UN: 「きかんしゃトーマス」SDGs で国連とコラボ、“やめよう、プラスチック汚染”ほか

P8 根本がおる所長の国連だより



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 国連大学本部ビル 8 階

TEL：03-5467-4451 URL：http://www.unic.or.jp